

|             |                                                                                                  |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 氏 名         | こ いづみ みやこ<br>小 泉 都                                                                               |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 (地域研究)                                                                                       |
| 学 位 記 番 号   | 地 博 第 47 号                                                                                       |
| 学位授与の日付     | 平 成 19 年 9 月 25 日                                                                                |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当                                                                          |
| 研 究 科 ・ 専 攻 | ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻                                              |
| 学 位 論 文 題 目 | Ethnobotany of the Penan Benalui of East Kalimantan, Indonesia<br>(インドネシア東カリマンタンのプナン・ブナルイの民族植物学) |

|        |             |             |             |  |
|--------|-------------|-------------|-------------|--|
| 論文調査委員 | (主 査)       |             |             |  |
|        | 教 授 小 林 繁 男 | 准教授 岩 田 明 久 | 准教授 重 田 眞 義 |  |
|        | 名誉教授 山 田 勇  |             |             |  |

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、インドネシア東カリマンタンの熱帯雨林地域に住む元狩猟採集民プナン・ブナルイを平成14年から平成19年にかけて長期フィールドワークによって調査・参与観察したデータを基にかれらの野生植物についての民俗知識 (folk knowledge: 以下知識と記す) を考察した研究である。プナン・ブナルイは1950年代半ばから定住し始め、現在では農耕と狩猟採集により生業が成り立っている。研究は以下の4つに要約される。第1に知識と生業体系の関係を明らかにしている。かれらの野生生物の利用に関する知識は多くの種にわたるものの、比較的単純でボルネオに住む農耕民の知識とは異なっていた。また、その知識は生業体系に影響されながらも必ずしもそれに制限されることなく発展してきた。第2にプナン・ブナルイの野生植物に関する知識を利用という観点から検討している。重要度 (利用価値) の高い植物に関して詳細な知識があるばかりでなく、それが低い植物についても豊富な知識を持っていることを示した。第3に個人間の知識の相違と共通性を学習過程から検討している。個人は他者から伝達される知識に加えて、観察によっても知識を得ていることを示した。個人的な観察経験は柔軟な知識の伝達や個人間の知識の変異にもつながる。第4は生物の民俗分類についての検討である。生物の利用、分類、命名についてのこれまでの理論の一般性を検討するとともに、命名体系が名称に現れる分類のメカニズムに影響する可能性を指摘した。

本論文の構成は第1章で詳細な先行研究のレビューを行っている。第2章では調査地の概略と植物採集・標本作成法、プナン・ブナルイの植物に関する知識についてのインタビュー、食事調査、家計調査の方法について記述している。

第3章では西プナンとプナン・ブナルイについてレビューし、調査村であるロング・ブラカでのプナン・ブナルイの歴史、林産物の利用や生業の実態、家計についての調査結果を述べている。彼らは現在、以前のサゴ主食からコメ主食に変化しているが、生計は林産物に依存していると結論している。

第4章ではプナン・ブナルイによる植物の民俗分類体系について概観している。包括分類群 (folk generic taxa) と個別分類群 (folk specific taxa) を定義づけ、これらの民俗分類群の性質を分析している。ここでは包括分類群は植物間の類似性から分類されていた。ただし、植物の重要度が分類のランクに影響していた。重要度の高い植物については種間変異が個別分類群で区別されていることもあったと記述している。

第5章は植物命名法についての記述である。包括分類群は一次名で命名され、個別分類群は包括分類群の名前に修飾語を加えた二次名で命名されることが多い。修飾語には植物の生育地や色、サイズ、毛の有無などの形態を表す言葉が用いられていた。

第6章は植物の利用に関する記述である。ボルネオの農耕民 (イバンとクラビット) との比較を行っている。プナン・ブナルイは農耕民とほぼ同数の有用植物を認識していた。しかし、利用目的ごとに比較を行ったところ、技術的な利用に関してプナン・ブナルイは多くの有用植物を認識している一方、種子植物の山菜、薬味植物、薬用植物、精神的な利用について

の知識が少ないことがわかった。また、利用の変化が文化、生活環境、資源供給量の変化によって引き起こされる例や、周辺農民から新たな知識を習得している例も記述している。

第7章では植物知識に関する変異と習得について記述している。30歳ぐらいまでに多くの森林植物を知るようになっていた。また、男性のほうが女性よりも知識量は豊富であった。包括分類群は個別分類群よりも多くの人に認識されていた。知識の豊富なインフォーマントにおいてすら個別分類群が一致しない場合があり、これが民俗分類における基準の問題を示唆すると考えられた。子供から青年にかけて親や村人から植物に関する知識を習得し、さらに個人が森林での経験からより多くの知識を習得すると結論付けた。

第8章と第9章は総合考察と結論である。生物の利用、分類、命名についてのこれまでの理論の一般性について検討するとともに、命名体系が民俗分類に重層的に影響する可能性を指摘している。また、植物に関する知識は、まず親や村人から習得し、さらに森林における個人の経験からより多くの知識を習得すると結論付けた。

付録としてブナン・ブナルイに関する(1)ブナン・ブナルイ語の音韻学的情報の附記、(2)野生植物に関する知識のリスト、(3)サゴヤシ知識、(4)植物名のリスト、(5)植物に関する用語のリストなどを記載している。

## 論文審査の結果の要旨

世界でも有数の生物多様性を擁するボルネオの熱帯雨林は、ブナンをはじめとする狩猟採集民に豊かな生活の場を提供してきた。しかし、ボルネオの狩猟採集民は、1950年代からインドネシア、マレーシア、ブルネイ各国の定住化政策と農耕の導入によって生業の転換を余儀なくされてきた。1960年代後半から始まる木材生産を目的とする森林伐採は狩猟採集民の生業の場を狭小化し、豊かな生物多様性に依存した生活形態を変容させていった。1980年代からは熱帯林の伐採が生物資源の搾取として問題化され、1990年代には、地球環境問題として取り上げられるまでになった。長年にわたって狩猟採集を行ってきたブナンにとって熱帯雨林の生物資源は彼らの生活の基盤であり、それゆえに彼らは熱帯雨林生態系を大規模に破壊することなく利用してきた。彼らが定住と農耕を受け入れ、既に50数年間も経ている現在、持続的に熱帯雨林を利用してきた彼らの知識が大きく変容する前に詳細に記述し、次世代へ残すことは熱帯生態学、民族植物学の成果としてだけでなく、地域研究にとっても焦眉の課題である。本論文がこれらの点を踏まえ、先行研究をはるかに凌ぐ詳細なブナンの民族植物学の記述を目指したことは非常に高く評価できる。さらに、本論文の学問的貢献として次の4点をあげることができる。

第1に狩猟採集を主な生業としてきたブナン・ブナルイが農耕を行うに至った過程について、調査を実施したロング・ブラカ村の歴史、林産物の利用、生計経済の実態などの詳細な調査結果から明らかにしている。彼らの主食は以前のサゴからコメに変化しているが、生計を林産物に強く依存しているという指摘はFAOや国連開発機構が定義するような貧困における「人間の安全保障」の具体例を示したものとして評価できる。

第2にブナン・ブナルイによる植物の民俗分類体系について、包括分類群と個別分類群を定義づけ、これらの民俗分類群の性質を分析している。また、植物命名法について、包括分類群は一次名で命名され、個別分類群は包括分類群の名前に修飾語を加えた二次名で命名されることが多く、修飾語には植物の生育地や色、サイズ、毛の有無などの形態を表す言葉が用いられていたことを明らかにした。ブナンに関しての申請者が行った詳細な記述と分析は民族植物学の分野でも高い水準にあるものと評価できる。

第3にブナン・ブナルイの野生植物に関する知識を利用という観点から検討している。利用価値の高い植物に関して詳細な知識があるだけでなく、あまり利用されていない植物についても豊富な知識が存在することを示した。利用価値からだけでは知識の豊富さを説明できないことを例証した点は、民俗分類と有用性に関する重要な争点に貢献している。また、個人間の知識の相違と共通性を植物名の学習過程から検討して、他者から伝達される知識に加えて、観察によっても知識が創造されている実例を示した。単独の観察経験に基づく知識に注目して、彼らの柔軟な知識の伝達や個人間の知識の変異にもつながっていることを示した点は知識の学習過程を主題とする認識人類学の分野にも重要な貢献をなしたと評価できる。

第4に本申請論文は(1)ブナン・ブナルイ語の音韻学的情報、(2)野生植物に関する民俗知識、(3)サゴヤシに関する知識、(4)植物名、(5)植物に関する用語、それぞれについて広範かつ詳細な記載を47ページにも及ぶ付録としている。これらは現在でも変化し、失われつつある民族植物学的な知識の貴重な記録として学術資料的価値があるだけでなく、地域の

人々への貢献としても重要な成果である。

以上のように、本論文は長期のフィールドワークと膨大な標本資料によって得られた豊富なデータをもとに、ボルネオ熱帯雨林における狩猟採集民ブナン・ブナルイの生業変容の実態を示したうえで、植物の民俗分類体系と利用の関係を詳述した。さらに、人々の知識資源として重要な民族植物学的知識の伝達と習得の過程の特性を明らかにし、地域社会における伝統的知識の継承のあり方を示したものとして高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年6月7日論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。